

## 訳読方式について

守 矢 信 明

1. 山田原実・島田実氏の『新しい仏文解釈法』（大学書林）は私の学生時代の「愛読書」のひとつであった。受験時代にも好きな参考書のひとつに研究社の『英文解釈法』（山崎貞・佐山栄太郎）というのがあった。いずれもフランス語や英語のイディオムに格調の高い日本語訳をあて、これを一種の公式として以下例題に取り組むという方式の語学参考書である。後者の初版が大正元年、前者でも昭和23年であるから、おそらく英仏のちがいはあっても、両書はわが国の語学教育書の中でもロング・セラーであったろうし、今後もそうありつづけるにちがいない。

英語やフランス語のような横文字をいかに立派な日本語にするか、伝統的な外国語教育の中心課題はひとえにこの点にかかっていたといつてよい。したがってテキストは会話調のものや日常生活的なものより、文学的、哲学的、思想的なものの方が好まれる。そしてそれらをいかに忠実かつ香り高い日本語に表現しなおすかという努力が、外国語学習者の（そして教授者の）最大の関心事なのである。外国語の大家というのは、つい最近まで、事実上翻訳の大家を指していたといつてもいいくらいである。

しかしながら多くを望まずとも、せめて原文読解の力だけは養成しようという願いのもとに、語学教育が訳読第一主義を貫いた結果はどうであったか。その答えとして「日本人は読むこともできない」〔1〕という、まことにショッキングな指摘がわれわれの面前に立ちはだかっているのである。この逆説をいったいどう受け止めるべきか。

たしかに翻訳が巧みである、日本語による解釈が優れているということそれ自体は非難されるべきことではない。そもそも原文を理解せずして翻訳など成り立とうはずがないからである。また優れた翻訳家が優れた語学の達人である

ことも認めよう。だがその裏も考えておかなければならない。すなわち優れた語学の達人が必ずしも優れた翻訳家とはかぎらないということである。このことは何を意味するか。翻訳の力と語学の力は別物だということの意味してはいないだろうか。結論をいえば、この両者が同じものだと考えたところに訳読主義の錯覚があったのである。

翻訳力と語学力を同一視した訳読主義は、原文の理解を一定のところで切りあげた、日本語自体の訓練に比重を置く。簡単な例をあげよう。例えば翻訳は、《Je suis heureux.》というフランス語文における“Je”を「わたし」とするか、それとも「自分は、ぼくは、わたくしは…」とするか、あるいは主語を訳さずに置くか、という取舍選択を強いる。だがそれはすでにフランス語の“Je”の理解を越えた、日本語の世界における問題である。逆に言えば、フランス語の理解としては“Je”が《一人称単数の話者を指し示す》ことを知ればほぼ十分なのであるが、それでは翻訳は成り立たない。ひるがえって日本語の綱目のなかで格闘を始めるところに、翻訳者の面目がかかってくる。

訳読方式の行きつくところは、結局この翻訳作業にほかならない。それは原文の理解に余計な負担を強いるばかりでなく、ひいては外国語を日本語に置きかえなければ理解も鑑賞もしている気持になれぬという悪癖をうえつけてゆく。その結果、原文を訳さずに理解するなどということは、とうてい思いも及ばぬ学習者や、原文の時間的話線に沿った読み方の苦手な学習者を際限もなく産みつづけることになる。学習の非能率は語彙力の貧困につながり、話線に沿った理解ができないということは聴解的理解もできないということになる。次の一文は、語学教育に関してなされたものではないが、翻訳的理解の落とし穴をついた、きわめて示唆に富む指摘である。

(時枝誠記の“実在体”をめぐるソーシャル批判への反論として) 服部四郎氏も正しく答えたように「entitéというフランス語を“実在体”と訳するのはよいが日本語の単語によって日本的に考察しながらソーシャル学説を批判することは危険」である。entitéを仏仏辞典にあたってみるまでもあるまい。これは事物(chose)の反意語であり、「哲学的な用語として、物の本

質を指し、その客観的存在様式は、関係の上にもみ成り立っている」(ロペール)のだ。

——丸山圭三郎『ソシュールの思想』(ロペールは仏仏辞典 *Robert*—引用者)〔2〕

まことに、“entité”を「実在体」と訳したからといって罪が訳者の小林英夫氏にあるわけではない。なぜなら誤訳か誤訳でないかという点からいえば、これは誤訳ではないからだ。むしろ非は「実在体」という日本語の単語によって“entité”を日本的に解釈した側にある。したがってこの問題がよく教えているように、フランス語の“entité”という言葉をどう理解するかということは、これを「実在体」と翻訳し、その翻訳された日本語をもとに(すなわち日本語の土壌のなかで)再解釈してゆくことではないのである。むしろ例えばこの *Robert* におけるような説明をもとに、概念上の意味を理解してゆくのでなければならぬ。ところが訳読方式は「哲学的な用語として…云々」のような長々しく、おさまりの悪い説明ではとうてい満足できない。何がなんでも、「実在体」というような対応訳の案出にたどりつかずにはいられないのだ。そして結局は、外国語の学習者に日本語の「実在体」という訳語を押しつけ、「哲学的な用語として……云々」のエッセンスの方は捨てさせるのである。翻訳ならばそれでよい。しかし、ことは語学学習に関わっているのである。

2. もちろん、外国語学習の初心者——それも大学生のように母語がすでに定着している成人者——に、日本語を介在させない学習が可能かどうかはおおいに疑問である。私自身は直接方式(例えばグベリナのザグレブ方式〔3〕)は理想の段階であって、日本語(母語)の介入は必要悪であると思っている。要は「訳しながら理解する」のではなく、「訳さなくても分かる」語学を目指す点にあらう。「分かる」度合いが深まれば必要悪の“必要”部分が減少するわけで、おのずから日本語による干渉も減じてくるはずである。フランソワ・ヴィヨンの有名な詩句〔4〕を例にとろう。

Mais où sont les neiges d'autant ?

- (1) 「さあれ古歳（ふるとし）の雪やいずくぞ」
- (2) 「さはれさはれ 去年（こぞ）の雪 いま何処」
- (3) 「それにしてもあの頃の雪は、どこにあるのだろう。」
- (4) 「どこに一ある？一雪は一かつての」

(1) は佐藤輝夫氏の、(2) は鈴木信太郎氏のそれぞれの名訳である。(3) は学校的な平均的訳。(4) は一見落ちこぼれの生徒の訳みたいだが、訳そうという姿勢がひとつもなく、原文の時間的順序にしたがって理解しようと試みている。そして本論が主張する語学教育の見地からすれば、(1)、(2) よりは(3)の方が、(3) よりは(4)の方がましだということになる。その理由は「原文の構造をすなおにたどっている」こと、「ゆるいままの日本語（必要悪）で語彙的意味をとらえており、したがって、それだけ原文に思いがふみこんでいる」ということ、この二点によってそういうことが言える。

さてこの試論は、以上に述べた方向に沿ってもし訳読方式に代わるなんらかの方法があるものならば、それを模索してみようというものである。

3. 訳読方式を離れた場合、どのようなアプローチが考えられるであろうか。私は四つの視点からこれを考えてみたい。第一の視点はひとくちに文の意味といっても、それはさまざまな単位や機能が錯綜しつつ規定しあった結果生まれてくるものだということである。ここでは意味が生ずる諸相をさらに三つの下位部類に分けて考えることにする。第二の視点は、文における《Modus（様態）—Dictum（事理）》もしくは《Thème（題）—Propos（説）》関係の把握の問題。これは文全体が伝えようとしているものを捉えるうえできわめて重要と言える。第三の視点は文体の把握について。そして最後に第四として、句読法の問題に触れてみたい。

3—1. 意味を汲むには最小限3つのレベルにまたがる知識が必要である。

3-1-1 その一は「構造的意味」（すなわち句構造）の理解である。日本人であれば、

「へのへのが もへじを でれんと たべました」

というこの文は、たとえその語彙上の意味を知らなくても構造的には《主語＋述語→主語（名詞）＋目的補語（名詞）＋動詞（過去形）》（ナントカが、ナントカを、ナントカのように、ナントカした）という意味であることを理解する。この場合、それを可能にしているものは格助詞であり、ある品詞に特有の接尾辞である。フランス語においてそれらの機能をになっているものは、語順であり、接尾辞であり、あるいは前置詞などである。文要素の相互関係が分かれば、われわれは少々の語彙の意味を知らなくても、文の大意を理解する。チョムスキーの“Colorless Green Ideas Sleep Furiously”（無色で緑色の観念はすさまじく眠る）について、ヤーコブソンは次のように述べている。

チョムスキーは“文法構造の全く非意味論的理論”を組み立てようと巧妙な試みを行った。この複雑な実験は、実は、見事な逆証明であって、文法的意味の階層構造を探る現在の研究にとって特に役立つものである。

——ヤーコブソン「文法的意味についてのポーアズの見解」〔5〕

ヤーコブソンによればこれは無意味な文ではない。なぜならこの文は文法関係までは破壊しておらず、われわれは文法関係をたよりにこの文を「真偽テスト」にかけることができる。すなわち、無色の緑色とか、緑色の観念とか、眠る観念とか、すさまじい眠りなどのようなものが、はたして存在するものかどうか…等々。つまり文の無意味さは語彙の組み合わせからくるのではないのである。真に無意味な文といえるものは、よしんば個々の語彙の意味は存在していても、それらを結わえる文法関係が破壊されてしまった場合でしかない。すなわち、

統辞形式と、それらが担う関係が薄れれば薄れるほど、メッセージの真偽テストは実行しにくくなる。[…] It seems to move toward the end. （終わりに近づいてゆくように見える）という発話を Move end toward seem. （近づいてゆく・見える・終わり・ように）のような無文法の言い換えにしてみると、それについては、“本当か”とか“本当にそう思っているのか”といった質問がその後に続くことがまずもってできなくなる。全く脱文法

的な発話は、実に無意味である。

——同上〔6〕

文の構造について情報をあたえているのは、統辞形式ばかりではない。句読法もまた統辞法に劣らず重要な役割をはたしている（なおイントネーションの問題は本論では触れないことにする）。それについては節を改めて述べることにしよう。

3-1-2 その二は語彙的意味の理解である。“entité”で言えば、「実在体」というのは訳語であってこの語の語彙的意味ではない。そうではなく、「哲学的用語として、物の本質を指し、その客観的様式は、関係の上のみに成り立っている」（Philos. Ce qui constitue l'essence d' un genre ou d'un individu. [……] alors que son existence objective n'est fondée que sur des rapports）というのがこの語の意味である。より厳密に言えば、語の意味とは他に言い換えられた語のことではなく、語の定義のことである。このことをもっと直接的に知るには、われわれが身近に熟知しているものが外国語に翻訳される際にどう変質するかを見ることによっていっそうよく見解できよう（すなわち、このことは外国のものが日本語化されるとき、われわれがどのような変質を知らず識らずの裡に受け入れているかということの逆証明になる）。テキストとして、ガリマール社から出ている二冊の翻訳書を取りあげ、そのなかからアトランダムに抜き出してみる。ひとつは、Hélène de Sarbois, G. Renondeau 訳による太宰治の *Soleil couchant* (夕日)〔7〕, すなわち『斜陽』から。もうひとつは Marc Mécréant 訳による三島由紀夫の *Le Pavillon d'Or* (黄金色の亭)〔8〕, すなわち『金閣寺』からである。

おむすび(les boulettes de riz : 米団子), 海苔で包んだおむすび(boulettes de riz enrobées d'algues : 海草で包んだ米団子) : 縁側 (la véranda : ベランダ), お蒲団(litterie, matelas : 寝具, マットレス), 水田(des champs de riz : 米の畑), 十畳間と六畳間 (deux chambres, l'une de dix, l'autre

de six nattes : 二つの部屋, ひとつは十枚のござの部屋, もうひとつは六枚のござの部屋。訳注 : ござは長さが 1.8 m, 幅が 90 cm で, 部屋の大きさを示す単位として使われる), 白足袋 (ses gants blancs : 白い手袋), 障子 (les shoji : ショージ。訳注 : 滑って動く仕切り, 部屋と外とを分離する), 本妻 (sa femme : 彼の妻), 松茸のお清汁 (la soupe aux champignons : きのこ入りスープ), 白石というおでん屋さん (le restaurant Shiraishi : レストラン白石) ——以上, *Soleil couchant* から。

下駄をつっかけ (enfiler mes sandales : サンドルをはく), 講談の中の (dans une histoire de nos livres : わが国の書物にある或る話の中の), 岡っ引 (détective : 探偵), 静かな諦観にみちた (doté d'un calme regard pénétrant l'écorce des choses : 物事の表面を透徹する穏やかな眼差しをもった), 土俵 (lice : 闘技場), 雑巾がけ (un coup de toile à laver : 拭き布のひとつすり), もんぺ (son pantalon bouffant : ふっくらした長ズボン) ——以上, *Le Pavillon d'Or* から。

「翻訳は裏切り」(Traduction, trahison)という格言風の語呂合わせがあるが、このように日本語による表現とフランス語訳とを並記してみるといっそうその感は深まる。ただしここでは意図的に日本にあってフランスにないもの、あるいは対応が大きくずれるものを取り上げてみた。この種のもは「裏切り」というより、むしろ翻訳の限界であろう。そのことをわきまえて、もう一度両者を通覧するなら、フランス語訳からはたしかに日本語が含みもつ情感のようなものが雲散霧消している。しかし論理的意味は通っている。それにこういったものは文化が生んだ一種の固有名詞とっていい。「障子」はあくまで“les shoji”でしかない。現物を目撃すれば一度に了解のつくものである。おむすびを「米団子」と呼んだところで、おそらく奇異の思いは始めのうちだけでであろう。むしろ真に相違を感じさせるのは、それぞれの言語による物事の捉えかたの相違に直面するときである。例えば『斜陽』のなかの「顔を見合わせ、何か、すっかりわかり合っものを感じて、うふふと私が笑うと、お母さまも、にっこりお笑いになった。」という部分は、フランス語では《Après avoir échangé de pe-

tits coups d'oeil, il nous parut vivre un moment d'absolue compréhension. Cela me fit rire et le visage de Mère s'éclaira d'un sourire. 》〔ちいさな一瞥を何度か交わしあったあと、私たちは完べきな了解の一瞬を生きたように思った。そのことが私に笑いを誘い、母の顔も微笑で明るくなった〕となっている。日本語の情緒的表現は、ことごとくフランス語の分析的表現に置き換えられている。訳読主義には「直訳」とか、「意識」といった便利な表現があるが、もしそのような言葉で視点の相違があいまいにされているのだとすれば、われわれは「訳す」ことによって肝心なものを切り捨てていることになるのである。

3-1-3 その三に移ろう。それは「文法的意味」である。フランス語ではとくに重視すべきものといえよう。辞書を引いても分からない意味、すなわち文法上生ずる意味の例をいくつかあげてみる。

a. Il n'y a pas *de* nuage dans le ciel. [空には雲がない]

Il n'y a pas *un* nuage dans le ciel. [空には雲一つない]

Mon dessin ne représentait pas *un* chapeau. Il représentait un serpent boa qui digérait un éléphant. (Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*) [私の絵に描かれているのは帽子なんかじゃなかった。象をこなしているウワバミだった]

フランス語には「否定文において、直接目的補語の前にある不定冠詞・部分冠詞は *de* に換わる」という規則があるのだが、その適用を受けたのが最初の例である。あとのふたつはこの規則の適用条件を満たしているにもかかわらず、不定冠詞が *de* に置き換わっていない。規則からの逸脱が別な意味を生産しているのである。すなわち前者は *un nuage* というかたちを残すことによって、数詞をかねた *un* を強調している (= *ne ... pas un seul*~)。また後者の例は厳密に言えば否定ではなくなってしまう。すなわち後続の文に呼応して対立を表しているのである (= *ne ... pas, mais*~) [9]。こうしたことを数えるものは、個々の語彙の意味ではなく文法上の知識、いや文法から逸脱した場



合のことも含めた文法上の知識なのである。

別の例を見てみよう。

- b. un boeuf 〔一頭の牛〕  
 du boeuf 〔いくらかの牛肉〕

英語では an ox(a cow)/beef というふうには語彙によって区別するところを、このフランス語では冠詞によって意味の差異を生みだしている。boeuf を「可算的」ととらえるか（不定冠詞）、「非可算的」ととらえるか（部分冠詞）によって「うし」と「ぎゅう」とを区別しているのである。これは一例にすぎないが、英語の語彙中心性とフランス語の文法中心性をみるには、同一編纂者による同一形式の「英仏辞典」と「仏英辞典」を比べてみるとよい。例えば *HARRAP'S New Standard* では、「英仏辞典」の方が「仏英辞典」よりも正味 243 ページも多い。ちょっとした小辞典ができようかというほどの分量である。むろんこれは単純なページ数の比較ではあるが、少なくとも英語が語彙数の豊富さを誇る言語であるのにたいし、フランス語がいかに語を効率的に駆使しているかということの、ひとつの証拠にはなる。

もうひとつ、時制さえもが大きく意味に関与してくる例をみておきたい。

- c. Puis il taraversa la rue, la remonta, s'aperçut qu'il *se trompait* de route, redescendit aux Tuileries, passa la Seine, reconnut encore son erreur, revint aux Champs-Élysées sans une idée nette dans la tête. il *s'efforçait* de raisonner, de comprendre. Sa femme n'avait pu acheter un objet d'une pareille valeur. Non, certes. Mais alors, *c'était* un cadeau ! Un cadeau de qui ? Pourquoi ? (Mauissant, *Les bijoux*) 〔それから彼は通りを横切り、街をのぼっていったが、道を間違えていることに気づき、またしても自分のあやまりに気づき、シャンゼリゼに引き返しはしたものの、頭の中にこれとってハッキリした考えがあったわけではなかった。彼はなんとか筋

道をたて、理解しようとした。妻にあんな高価なものが買えたはずがない。うん、それは確かだ。となれば、あれは贈り物だということになる！だれの贈り物なんだ？何のための？]

この例でイタリック体の個所は、いずれも直接法半過法と呼ばれているものである。しかし、その文法上の意味はおなじではない。《se trompait》は時制の一致で主節の動詞とおなじ時間帯に動作がおこなわれたことを意味している。次の《s'efforçait》は過去における進行中の動作、もしくは臨場効果を求めた描写の半過去（ズーム・アップの効果がある）。最後の《était》は自由間接法と呼ばれている語法の半過去で、その時点における登場人物のひとりごとや物想いを、カッコや引用符なしに、そのまま地の文中に投げ出したものである。

文法上の意味の多くはかならずしも語彙化されえない（だから翻訳が難しい）。われわれはふつう文法上の意味のことを語彙の意味と区別して、当該文法事項の「用法」と呼んでいる。例えば定冠詞には「a. 前項照応, b. 種別, c. 総称…等」の用法があるというように。けれども同じ「総称」にも三通りの提示のしかたがあってそれぞれは意味（ソシユール用語では「価値」）を異にする。日本語で「男というものは……」というところでも、それを《Un homme》（どの一人をとりあげてもいいが、およそ男というものは）とするか、《Les hommes》（男にもいろいろあるが、それら全部をひっくるめて男というものは）とするか、《L'homme》（定義上、男なるものは）とするかでもの捉えかたがちがってくる。それらのちがいは直接表面には現れないが、表面よりも広い深層で言表をいちいち規程し、方向づけ、統括している。「訳」には現れないが、意味を厳然と統括しているのである。そうしたことを端的に示しているのが次のアンドレ・ジイド『賈金づくり』のなかの例である。

—Elle lui disait : 《Vincent, mon amant, mon amour, ah ! ne me quittez pas !》

—Elle lui disait vous ?

—Oui. N'est-ce pas que c'est curieux ?

（「彼女は彼にこう言ってたんだ、『ヴァンサン、あたしの恋人、あたしの  
 だいじな人、ああ、あたしを捨てないで下さい』って」「彼に vous なんて  
 言ってたのかい?」「そうなんだ。おかしいだろう?）」

この二人の間では「彼に vous なんて言ってたのかい?」「そうなんだ。おかし  
 いだろう?」という会話がごく自然に交わされている。しかし前の女の台詞の  
 なかにはどこにも《vous》などという言葉は現れていない。実をいえばこの  
 《vous》は動詞《quitter》の活用語尾のうちに陰在しているのである。つまり  
 ここは、女が tutoyer（親称）で話さずに vouvoyer（他人称）で話している、  
 恋人同士なのに何やら雲ゆきがおかしいと二人が話しているところである。こ  
 れなどは「訳さない」から理解できるのであって、「訳しながら」ではかえって  
 理解できなくなってしまう好個の例ではあるまいか。

3-2. 第二の視点は、様態—事理、もしくは題—説関係にたいする理解で  
 ある。Ch. バイイ [10] によれば、様態とは「文の精髓」であって、表象（すな  
 わち事理）にたいする話者の態度をいう。例えば《Je crois que tu mens》（き  
 みが嘘をついていると私は思う）という文において、《Je crois》が様態性を表  
 している部分、《tu mens》が事理を表した部分であり、《que》はつなぎである。  
 「きみが嘘をついている」という事理は単なる表象であって、それ自体は無色  
 透明でしかない。それを話者がどう受け止めるか、どう認証するのか、どう評  
 価し、どう欲求するののかによってはじめてこの文に生命が通る。

ところで《Je crois que tu mens》という文はどちらかといえば重苦しい、  
 公式的な文であり、実際上の様態性と事理の現れはさまざまなかたちをとる。  
 一例として、様態、事理が外顯的に明示されているものから、次第にそれらが  
 内顯化されていくようすをバイイの例でたどってみよう。

1. Je veux que vous sortiez. (あなたが出ていくことを私はのぞむ)
2. Je vous ordonne de sortir. (出ていくことを私はあなたに命ずる)
3. Il faut que vous sortiez. (あなたは出ていく必要がある)

4. Vous devez sortir. (あなたは出ていくべきだ)
5. Sortez! (出て行ってください)
6. A la porte! (戸口へ)
7. Ouste! (そら [出ていくことを促す掛け声])
8. 戸口を示す身ぶりと、いらだちをしるす顔つき
9. 邪魔ものを力づくで押しだすこと

様態主辞, 様態動詞, 事理主辞, 事理動詞が明示された1. のような文は, これこれの事態(すなわち「あなたが出ていくこと」)にたいし話者がどういう態度をとっているか(すなわち「私はのぞむ」)が明瞭に読みとれる。しかしながら例文は, 順次これらの要素を少しずつ他の成分に溶けこませ, 分析的表現から総合的表現への歩みを示している。8. 9. ではわずかな言表さえ失われている。これについてバイイはこう付記している, 「これらの例をひとつひとつ見ると, 二つの認証にみちびかれる: a) これらの型をつぎつぎに渡っていくと, 論理的言表のしかるべき成分が他の成分のなかに溶けこんでしまうこと, または分節言から消え去ること, b) しかし精神は表現の欠陥を苦もなくおぎない, 言表は本質的なものを一つも失わないこと, がわかる。」[11]

バイイの主張は《Sortez!》という単純な命令文のなかにも, 《Je vous ordonne que vous sortiez》という基底構造がひそんでいるのだという点にある。「あなたが出ていくこと」, それにたいして話者である「私」が「欲求している(命じている)」ということがこの文の「精髓」というわけだ。この両者の関係はそれぞれ《que》を境にして, 主節と従属節によって示されているのだが, 言語はいつもそのような明示的なかたちをとるとはかぎらない。むしろ多くは上例のようにさまざまな現れ方をする。しかもバイイも言うように「理解は外顯的表現や分節的記号のいやまず窮乏を苦しめないのだ。表現は語が不足するにつれていよいよ明瞭に, いよいよ尖鋭にさえなる」[12] ののである。

「様態一事理」の関係はあらゆる文に存在する。ただしその現れ方は顯在的の場合もあれば, 陰在的の場合もある。たとえ陰在的の場合であっても, 文が「これこれについては」「これこれである」ということを伝えることに変わりは

ない。その関係をより一般的なかたちで捉えようとしたものが「題一説」関係である。題一説関係を問題にしようとするときには、もはや文要素の個別的機能（主節、従節、あるいは主語、目的補語、状況補語……等）や品詞（名詞、動詞、形容詞……等）に拘泥する必要はない。それらよりもひとつ上のレベルが問題になってくるからである。すなわち、狭義の主語—述語の関係だと、形容詞は名詞を修飾し、副詞は動詞や形容詞を修飾し…といった関係を超越するのである。題一説関係は、バイイの言葉を借りるなら、すべて「Aについていえば（A？）、それはZだ」という関係に還元される（A—Zは、Z—Aというかたちも取りうる）。

簡単な例をあげよう。

a. Il est intelligent. [彼？→利口だよ]

Il est intelligent? [彼が利口だ？→私は疑問だ]

La femme intelligente. [その女？→利口だよ]

La femme intelligente? [その女が利口？→私は疑問だ]

b. Il est mort. [彼？→死んだよ]

Il est mort naturellement. [彼が死んだこと？→ごく自然にさ]

こうした捉えかたの方が、より自然な文把握という点ではるかに実情に適っている。バイイも言うように「言語による思想（pensée）の言表作用（énonciation）は、すべて論理的に、心理的に、および言語的に規程」された「織物」である[13]。言表を組み立てるにはこの三つのうちのいずれをも欠かすことができない。逆に言表を理解するには、この三つのいずれに偏しても片手おちになる。そして——言表理解にはここが肝心だが——「この三つの様相は部分的にかさなりあうにすぎない」[14]ということである。換言すれば分節言の単位の区切りと、心理や論理をふくめた広義の意味単位の区切りは、部分的にしか重なっていない（つまりずれている）ということである。だからこそ、逆に品詞のかかり具合だと、狭義の主述関係だとかに拘泥してはいけないということになる。例をあげよう。

- a. Il pleut. Je ne sors pas. [雨が降っている。私は出かける]
- b. Comme il pleut, je ne sors pas. [雨が降っているので、私は出かける]
- c. A cause de la pluie, je ne sors pas. [雨のせいで、私は出かける]
- d. La pluie m'empêche de sortir. [雨が私の外出を妨げる]

題(A)一説(Z)関係でいえば, a. が“A-Z”, b. c. が“Z-A”, d. はそのどちらともとれる(「雨?それは私の外出を妨げる」とも, 「雨だよ, 私の外出を妨げるのは」とも)。いずれにせよ, これらは同じことを表した四つのヴァリエーションにすぎないということだ。それをふたつの文で表すか(a), ふたつの節で表すか(b), 前置詞句や名詞句のなかに閉じ込めてしまうか(c, d)というだけのちがいである。ところが訳読方式では, 「言語的規程」に拘泥するあまり, これらをなんとか「訳しわけ」ようとする。文法的意味のように翻訳不可能なものにたいしては無頓着なのに, 形式のヴァリエーションには神経質になる。同じことは次のような場合にもいえる。

Il y avait toujours eu, sur la planète du petit prince, des fleurs très simples, ornées d'un seul rang de pétales, et *qui ne tenaient point de place, et qui ne dérangeraient personne.* (Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, VIII)

この一文中には *qui* で導かれる二つの関係節がある(イタリック体の部分)。しかし意味上は一つのかたまりである(つまり「場所をとらなかつた」, 「そしてまた誰の邪魔もしなかつた」という二つのかたまりではなく, 「場所をとらないので誰の邪魔にもならなかつた」(Z-A)という一つのかたまりである。付け加えておくがこれは決して特殊な例ではなく, 類例はいたるところに転がっている)。ところが訳読主義はたいいていの場合, こうした一つのかたまりを二つのかたまりにとらえてしまう。おそらく「誤訳」をおそれるあまり狭い文法の枠

を一步も出ようとしなからである(もっともこの責任の99%は受験文法にあるが)。

私は先に「訳読主義は、原文の理解を一定のところで切りあげた、日本語自体の訓練に比重を置く」と述べた。意味を糾合するものが語彙的に示されている場合はまだいいのである(例えば《Je ne crains rien des tigres, mais j'ai horreur des courants d'air.》[あたしは虎が怖いんじゃないくて、風が怖いのよ]における《ne... pas, mais...》)。けれども語彙的糾合力がいまの《ne... pas, mais...》ほど熟していない場合(例えば《Bien sûr, ma rose à moi, un passant ordinaire croirait qu'elle vous ressemble. Mai à elle seule elle est plus importante que vous toutes...》[なるほど、ぼくのバラの花もありきたりの通行人がみたらあなたたちとおなじだと思いかもしれない。だけどその花だけでもそれはあなたたち全部よりも大切なんだ]における《Bien sûr... Mais...》)だとか、あるいは最前に示した二つの qui におけるように、両者を糾合する語彙的要素がまったく表面から消えてしまっている場合は、両者の関連がさほどの罪悪感もなしに等閑にふされるのが通例である。

3-3. 第三の視点は発話の動機についての理解である。ここでは個々の文というよりも、集合としての文、すなわち談話(discours)に目を向け、それを「文体」の問題として考えてみる。したがってここで文体というのは「文の内容や伝えるべきメッセージを読み手(聞き手)にもっとも効果的に伝えるための文章の型」というほどの意味である。

さて言うまでもなく、発話の動機はひとつの文、ひとつの語句、ひとつの語のなかにさへ潜み、そうした点でこれまで述べてきたことすべてが発話の動機の把握に関係してくるといえる。だが、語の意味や、文法上の意味、様態性、題一説関係、等を把握しえてもなおかつ理解の範囲を超えるものが残る。例えば「ドアを開けよ」(Ouvre la porte!)という一文は、言語的にも論理的にも一見問題はなさそうだが、しかしドアがどこにも見当たらない場所での発話となれば事情は一変する。あるいは臨終のゲーテが「もっと光を!」と言ったからといってローソクを持ってきたり(ゲーテは単純にローソクを要求したのだ

という説もあるが), また「(何かへまをしでかして) あんたはほんとにお利口さんだよ」と言われて喜んだりするのは, 個々の文の意味は理解していても, 発話の動機や目的を理解しているとは言えない。私の学生時代の友人がパリの Alliance française での授業中に, 不熱心にも隣の人と私語をかわしていた。しばらくして先生が二人の前にやってきて穏やかにこう言った, 《Vous pouvez sortir.》[あなたがたは出ていくことができます]。さぞやきつい叱責が飛んでくるだろうと内心はらはらしていた友人だが, ことのほか優しい言葉にほっと胸をなでおろして教室をあとにした。それにしてもどうも話がうますぎる。よくよく考えたすえ, 先生の言葉が《出ていきなさい, さもなくば私語をやめよ》という命令の迂言法であったことによりやく思い到り, 冷や汗が流れたということである。これも発話の意図, 目的が理解できなかったことに由来するものだ。

ところで発話の動機や目的は言葉を理解するうえで欠かせないものであるが, 語学上の問題を超越するところがすくなくない。この問題を論じている Oswald Ducrot [15] は, いみじくもその論文のタイトルを *Dire et ne pas dire* (「言うこと, 言わないこと」と) と名づけているが, そこでの論議はすでに言語学を超えて, 論理学, 哲学, 心理学など他方面の分野におよぶ。ここではあくまで「言われている」ことをもとに, それにもかかわらず訳読方式の理解からは洩れていくものを拾いつつ, この問題の一端をみるにとどめたい。

以下に掲げる六つの文例は, 過去に私のフランス語の授業において使用したテキストの中から抜き出したものである。一応の“日本語訳”を添えるが, 訳はあくまで添え物である。

- a) Une grave collision qui a fait neuf blessés s'est produite hier à 22 h 45, devant le n°107 du boulevard Voltaire, entre un autobus et un camion.

Pour une raison encore inconnue, un autobus de la ligne n°140 a violemment heurté la remorque d'un poids lourd en stationnement sur le côté droit du boulevard.



新聞記事である。話者の態度は「……という事実を伝達する」ということに限られる。したがってわれわれは、事理の部分すなわち「情報」だけに注目してゆくだけでいい。事理における題一説関係も単純で、ほとんどがA?それはZだ(あるいはZだ, Aは)の繰り返しである。冒頭の部分で言えば「大きいんだよ, 事故は/事故? 9人の負傷者をうんだんだよ/9人の負傷者をうんだ大事故? 昨日の22時45分に起こったんだよ……」という具合である。その際に主語だとか動詞だとか, かかりの具合などは無視しても理解が可能であり, むしろ品詞の機能にとらわれない方が自然な理解に達しうる。なぜならここでの中核は語彙が担う情報であって, 文法はあとから整備のためにほどこされたようなものだからである: 「大きな衝突事故, 9人の負傷者, 起こったのはきのうの22時45分, ヴォルテール通り107番地, バス対トラック。原因はまだ不明, 140番線のバスが激突したのは大型トレーラーで, 駐車中だった, 通りの右側に」

- b) Après dissipation généralement assez rapide de brumes matinales surtout abondantes dans les vallées du sud-ouest et de l'est, il fera beau sur l'ensemble du pays. Le ciel sera le plus souvent clair ; seules la Corse et la Bretagne verront apparaître quelques nuages isolés au cours de la journée. Les vents, toujours orientés à l'est, seront faibles.

これも「情報」文。文の姿は情報中心のためにイビツとさえ言える(文章の美よりも情報が優先している)。a)同様, 自在に(イビツなままに)読み取ってゆけばよい: 「だいたい, かなり速く消えてゆく, (何が→)朝のもやが・特に濃いのは南西部と東部の谷間, そのあと, 晴れるだろう, 全国的に。全般に晴天である, ただコルシカ島とブルターニュ地方にところどころ雲が日中に現れよう。風は西向きがつづくが, 弱い。」

- c) Nous pardonnons souvent à ceux qui nous ennuient mais nous ne

pouvons pardonner à ceux que nous ennuyons.

「論理関係」が問題である。この場合は a), b)と違って文要素の論理関係をしっかりとらえなくてはならない。うがった意見, 逆説的な命題が多いから恣意的な読み方は禁物である。ひねりや機微が生命で, 反面, 文構造は簡明である。語彙は外延が狭く, 内包の広い抽象的, 一般的なものが多い: 「われわれは~の人には寛大だが, ~の人には寛大になれない」→「われわれは自分を退屈させる人々には寛大だが, 自分が退屈させる相手には手きびしい。」

d) La meilleure façon d'imposer une idée aux autres, c'est de leur faire croire qu'elle vient d'eux.

上と同じ「論理関係」が正しくつかまえられればよい: 「他人に自分の考えを押しつけるいちばんいい方法は, 本人が自分で思いついたように仕向けることである。」

e) Un homme était assis dans un fauteuil de rotin, son chapeau melon sur les genoux, et il était si calme, il regardait devant lui avec tant de patience qu'il avait l'air d'être installé dans un train. Ce qu'il regardait, c'était le vestibule éclairé au bout duquel la nuit humide se dressait comme un mur.

文学作品から。文学作品の中にはこれまでに述べたことがらいろいろなかたちで織り込まれている。ここではあるひと言(表現)のために状況をしつらえ, 文脈を導いてきたと言える「詩的表現」を取りあげる。何くわぬ顔でそれとなく織り混ぜたように見せているが, すべてはそのひと言の挿入にあるのである: 「ひとりの男が藤椅子に座り, ひざに山高帽をのせていた。落ち着きはらって前方をじっと見やっている様は, 汽車にでも乗っている風だった。何を見ているのかというと, 灯りに照らされた玄関だった。玄関のその先には湿気

をふくんだ暗闇が壁のようにそそり立っていた。」(シムノン「ロンドンの男」)

- f) Ne pouvant dormir, il gravit la falaise et regarda la mer. Le flot se brisait sur les écueils. Le vent du large mêlait au mugissement des lames ses miaulements sinistres. La lune fauve dans sa fuite immobile parmi les nuées jetait sur l'Océan ses lueurs émouvantes.

これも文学作品から。前例と同様、ただひとつの表現に焦点が当てられている。「眠れないので彼は断崖をよじのぼり、海を眺めた。(ここまでが単純過去で、状況の経緯がてきばきと説明されている。ここから先は半過去が使われ、ズーム・アップされた場面がパノラマのように眼前に広がる) 岩礁のところで波が砕けていた。沖合からくる風には波のうなる音と不吉な海ねこの声が入り混じっていた。鹿子色の月がむら雲のなかで *fuite immobile* (停止しかつ逃亡し)、心に迫りくる月あかりを波間に落としていた。」「アナトール・フランス「クリオ」)

*fuite immobile* というのは修辞学でいう「撞着語法」(Oxymoron) である。ここではせわしく流れる黒雲と、そのあわいに浮かぶ月の様がこうした表現によって印象的かつ効果的にとらえられている。

- g) Enfin, comme le dernier coup de dix heures retentissait encore, il étendit la main, et prit celle de Mme de Rênal, qui la retira aussitôt. Julien, sans trop savoir ce qu'il faisait, la saisit de nouveau. Quoique bien ému lui-même, il fut frappé de la froideur glaciale de la main qu'il prenait; il la serrait avec une force convulsive; on fit un dernier effort pour la lui ôter, mais enfin cette main lui resta.

やはり文学作品だが、単純過去の緊迫感と半過去の持続性がふたりの不倫の恋の現場をもの見事にとらえている。作者および読者の視線は、顔から下、

つまり当のふたりの手の動きだけに集中している。手の動きから、ふたりの表情や、心理や、胸の動悸まで描ききっている。しかもそうした表現上の効果が語彙的な意味からではなく、文法上の意味によって産出されているのである。このことは同時に翻訳不可能をも意味する。したがって訳読方式では、この決定的部分が無視されることになる。以下の大要もまた、訳であるかぎり残念ながら原文の形骸にすぎない。「ついに10時の鐘がなり、その最後の鐘の音がまだ鳴り響いていた (*retentissait*) とき、ジュリアンは手をのぼし (*étendit*)、レナル夫人の手を取った (*prit*)。夫人はその手をすぐ引っ込めた (*retira*)。彼は自分のしていることもよくわきまえぬまま、再び手を握った (*saisit*)。気は動転していたが、それでもいま握っている手の氷のような冷たさにはっとした (*fut frappé*)。彼は発作的な力でその手を握りしめた (*serrait*)。彼から逃れようとする最後の努力がなされた。しかし、その手は結局そこに残った。」(スタンダール「赤と黒」)

実をいうと、この場面はジュリアンとレナル夫人、およびその女友達のデルヴィル夫人の三人が散歩の途中にひと休みして、デルヴィル夫人、レナル夫人、ジュリアンの順に腰をおろしているさなかの出来事である。このあと「デルヴィル夫人に勘づかれないように、なにかを話さなければと彼は思った」という一節があるから、時間的にもきわめて短い間のことであつたろう。そうした緊迫した短時の出来事を作者は半過去と単純過去の対比によって描出しているのである。すなわち鐘の音がガラーン、ゴローンと鳴りひびきその余韻がまだ残っているという部分が、半過去によって線状的に引き延ばされ、その間に起こった二人の激しい手のやりとりは単純過去により、非情なまでにてきばきと処理されている。

翻訳に現れることが不可能で、文法的に注目される表現がもうひとつある。引用の最後の部分、すなわちジュリアンから手を引く力を失ってしまったレナル夫人を、作者は“*Mme de Rênal*”でもなく、“*elle*”でもなく、主体性のはっきりしない“*on*”で指示しているのである。

3-4. さて最後に句読法の問題に触れておこう。われわれの日本語では、

句読法といってもその大半は「まる」と「てん」に集中し、その他の記号はほとんど恣意的に使われているのが実情である。フランス語の場合においてもかならずしも恣意的でないとはいえないが、それでも日本語よりははるかにコード化され、種類も多い。句読法に通じることは、先の「構造的意味」のところでも触れたが言表の構造を把握するうえできわめて重要である。アルベール・ドパーニュは*La Bonne Ponctuation* [16] の中で面白い実験を行っている。表面的には二義的な役割しか負っていないかのようにみなされている句読点だが、これをとり外してしまったらどうということになるか。

ILYALONTEMPSQUEVOUSETESICIDIXSEPTANSILA  
TTENDPOURQUOILEVOYAGERUDETAILLELEVISAG  
ELESYEUXCLAIRSDEJALASSESPRESDESTEMPSLES  
CHEVEUXGRISLHOMMEREGERDESIMPATIENTE

このけたたましい記号列を眺めるなら、まるで楔形文字か何かを目にしたときのような軽いめまいさえ覚える。これを、以下の句読記号を加えた書記法と比べてみるなら、そのありがたみがどれほどのものであるかが心底より実感できよう。

—Il y a longtemps que vous êtes ici ?

—Dix-sept ans—il attend—pourquoi ?

Le voyageur détaille le visage : les yeux clairs déjà lassés, près des tempes les cheveux gris. L'homme regardé s'impatiente.

「ここに来てからずいぶんになるんですか？」「10年になりますが」と言いかけてしばらくしたすえに、「でもどうしてですか？」旅人はその顔を上げしげと見やった。すでに倦みつかれているが澄んだ眼、こめかみにかかる白いものの混じった髪。見つめられた方は苛立った。

さてこの中だけでも《—》, 《?》, 《—……—》, 《:》, 《, 》, 《. 》, 《' 》といったさまざまな句読記号が登場している。それぞれは「作者ではなく話者のことばをそのまま表示する」, 「～ということが疑問である(様態性の表示)」, 「挿入文である」あるいは「ここは作者の注記である」, 「すなわち(付加的説明)」, 「辞項単位の分離」, 「文の終わり」, 「eの省略」といった実に豊富な情報を伝えている。

もうひとつ例をあげてみる。

—Mais cet ascendant, interrompis-je, dépend de ceci : le voleur sait-il que la personne volée connaît son voleur ? Qui oserait ?... —Le voleur, dit G..., c'est D..., qui ose tout ce qui est indigne d'un homme, aussi bien que ce qui est digne de lui. (Edgar Allan Poe, *La Lettre volée*, trad. par Charles Baudelaire)

(「しかしそういった有利さは」と私は口を狭んだ、「次の点次第さ。つまり被害者に顔を知られているということを泥棒の方でも知っているかどうかということさ。いったい誰があえて……」泥棒はD...だよ」とG...は言った、「あいつなら、人間にふさわしいことでなかろうと、ふさわしいことであろうと、あえて何でもやるさ」)

ここにも様々な記号が登場する。いま「中断符」(points de suspension)と呼ばれるものに限ってみるなら、三つある。《G...》と、《D...》と、《Qui oserait?...》である。はじめの二つはドバーニュの言う“la discrétion du nom de la personne”(人名の言い控え)であることが容易に察せられよう。しかし《Qui oserait?...》は何を指示しているのだろうか。煩をいとわずドバーニュの掲げる説明項目をすべてあげてみるなら、中断符にはこれだけの用法がある [17]。

#### A. 音律上の価値

- a) 話の途中における出来事の発生を示す
- b) 相手方による話の中断を示す

## B. 心理上の価値

- a) 質問に的確に答えようとする際の話者の黙考を示す
- b) 記憶を呼びさまず際の話者の思い直し、訂正を示す
- c) 激しい情動の結果、切れぎれの話しぶりを示す
- d) 強い困惑を示す
- e) 告白の際のためらいを示す

## C. 喚起上の価値

- a) 読者に熟考し、夢想し、想像するよう促す
- b) 「等々」に相当するものを示す
- c) 前文との関連づけ、前文との間の時間の経過を示す
- d) 沈黙による不満を示す

## D. その他の価値

- a) 故意の言い落とし
- b) 人名の言い控え
- c) 露骨、ひわいな言葉の言い控え
- d) 引用文中の省略箇所を示す

さてこうした予備知識を念頭においてわれわれの引用に戻ろう。消去法によって各項目ごとにチェックしてみるなら、A-b)の「相手方による話の中断を示す」というのが残る。私の直感ともそれは一致する。というのも、これは二人の人間の会話であり、一方の会話が《Qui oserait?...》と問いかけたところで、話手が交替している。《?》によって《Qui oserait》が疑問文であることも分かる。疑問を発しかけたところで、次なる話者が話し始めたのである。さらに決定的なことは、次なる話者がこの言い回しを自分の台詞の中で取りなしている点である（《qui ose tout ce qui ...》）。これらの点からこの中断符合が「みなまで言うな。あとはおれに任せろ」という、相手方による話の中断だということがわかるのである。

句読法についてはまだまだ未知の部分が多い。その急速な発展は言語の歴史

においてけっして古いものではなく、印刷術の発達と軌を一にしている。つまり言語の必然から生まれたというより、書記法や印刷術の便宜にその発生を負っている。しかしいまや、句読法は誰が考えてもなくてはならぬものである。I. A. リチャーズはその『翻訳論考』において、「われわれの用いる語の働きは、驚くほど広範囲にわたる思考の配慮のもとに管理されているのだが、そのことをひとたび人が認めるなら、語の変幻自在な性質を研究し、これを制御するための表記法が必要なことは明々白々である」と述べ、言語のあいまい性を排除するために、いちいちの辞項にわたってその機能を明示するやり方、すなわち特殊な引用符を開発しそれらによって各辞項を囲むやり方を提案している〔18〕。リチャーズの提案は言語の用法を指定するメタ言語の開発にあるのだが、あらためて開発するまでもなく、すでに句読法そのものがすぐれてメタ言語的な機能を負っているのである。発生においてはともかく、いまや句読法は単に印刷物を見やすくするための記号群ではない。例えば《;》は、「文法上の文はひとくぎりでも意味の上ではまだ話がつづいている」ことを告げ、《?》は「疑問」を、《!》は「驚き」を、《?!》は「驚くべき疑問」を、地味ながらきっぱりと告げている。あるいは「これでこの段落は終わります」とあえて言葉に出さなくても、文末の「まる」とそのあとにつづくいくばくかの空白は、何よりも雄弁にその段落の終わりを告げている。

4. 以上私は四つの視点から、訳読方式に代わるものを模索してきた。しかし結果的には、それは、言葉の理解というものがどういふものであるかを考えるための叩き台にすぎなかったかもしれない。訳読方式というのはわれわれが想像する以上におおきな巨人である。なにしろそれは漢語を学ぶにあたって返り点を打った時代から連綿とつづいてきているものである。それほどの長きにわたって訳読方式がわが国の語学教育を支配してきたということは、やはりそれなりの長所や柔軟性があつたからであろう。けれどもそこにはまた、先進国から物事をひたすら吸収するという受け身に安住した姿勢も伺える。この姿勢はともすれば、言葉そのものより、言葉が伝える「内容」を問題にしたがる。しかしあえて言うなら、言葉には「内容」などというものはない。あるのは、



「内容」を生みだす発想であり、その発想をささえる枠組みおよび形式である。学ぶとすればそのところだろう。

〈注〉

- 1) 竹蓋幸生, 『日本人英語の科学—その現状と明日への展望』, 研究社, 1982, 128頁以下を参照のこと。
- 2) 丸山圭三郎, 『ソシュールの思想』, 岩波書店, 1981, 48頁
- 3) クロード・ロベルジュ編著『ザグレブ言語教育—理論と実践』, 学書房出版, 1973
- 4) François Villon, *Ballade des Dames du temps jadis*. (「ヴィヨン詩」, 佐藤輝夫訳, 青朗社, 1946/『ヴィヨン全詩集』, 鈴木信太郎訳, 岩波文庫, 1965)
- 5) Roman Jakobson, *Essais de Linguistique Générale*, trad. par Nicolas Ruwet, Les Editions de Minuit, Paris, 1963, p. 204 (ロマン・ヤーコフソン『一般言語学』, 川本茂男監修, みすず書房, 1973所収, 178頁)
- 6) *Ibid.*, p. 206 (同上, 180頁)
- 7) Osamu Dazai, *Soleil couchant, Crépuscule de l'Aristocratie*, trad. par Hélène de Sarbois, Gallimard, Paris, 1961
- 8) Yukio Mishima, *Le Pavillon d'Or*, Kinkakuji, trad. par Marc Mécréant, Gallimard, Paris, 1961
- 9) David Gaatone, *Etude Descriptive du Système de la Négation en français contemporain*, Librairie Droz, Genève, 1971, p. 121以下でこの問題を扱っている。
- 10) Charles Bally, *Linguistique générale et linguistique française*, Ed. Francke Berne, 1965, Première partie, Ch. 1 (シャルル・バイイ『一般言語学とフランス言語学』, 小林英夫訳, 岩波書店, 1970, 第1編第1章)
- 11) *Ibid.*, p. 41 (同上, 34頁)
- 12) *Ibid.*, p. 41 (同上, 34頁)
- 13) *Ibid.*, p. 35 (同上, 27頁)
- 14) *Ibid.*, p. 35 (同上, 27頁)
- 15) Oswald Ducrot, *Dire et ne pas dire, principes de sémantique linguistique*, Hermann, Paris, 1972
- 16) Albert Doppagne, *La bonne ponctuation: clarté, précision, efficacité de vos phrases*, Duculot, Paris, 1978, p. 7
- 17) *Ibid.*, pp. 44-49
- 18) I. A. リチャード「翻訳論考」, 守矢信明訳, 金花舎, 1978 (アーサー・F. ライト編著『中国の思考様式』所収), 377頁以下